三河アララギ

平成三十一年　2019年

四　月　号

第六十六巻　第四号

ニューヨーク日記（150）

http://blueshoe.copetin.com/

BlueCat, Shoe Lady

Argentinian Christmas?

Blue Shoe Diaries

今年のクリスマスはニューヨークで過ごしました。クリスマスのご馳走の事を考えていたらアルゼンチンで子供の頃食べたご馳走が懐かしくなり再現にチャレンジ！ ローストビーフとパイナップルとハムにキャラメルソースをかけた物にヘラティーナと呼んだチキンのゼラチンのサラダ、クラシックなフレンチみたいに！ アルゼンチンではケルケルおばあちゃん（ラケル）が美味しく作ってくれたなぁ～と思い出しながら食べました。

We are in New York for Christmas this year. And got nostalgic about festive food from Argentina. Or at least what we thought was traditional. So we recreated some childhood food memories. This roasted beef with pineapple and ham with a caramel sauce (love the crunch from the caramel sauce), and an aspic that would make my French chef proud? Better remembered as gelatina. Our grand-aunt Quel-quel (Raquel) used to make all this food so well! Forever engrained in our food memory.

目次

第六十六巻第四号（通巻七八四号）

表紙・芭蕉　今泉　由利（1）
ニューヨーク日記（150）　Blue Shoe（2）　御津　磯夫（4）
アカンサスの徑　大須賀寿恵（5）
三河アララギ歌集Ⅱ　今泉　米子（6）
歌集「續草々」　河原　静誠（7）
三河アララギ歌集Ⅱ　岡本八千代（8）
「老いの夢」　弓谷　久子（10）
百人一首　今泉　由利（12）
雄蕊　阿部　淑子（13）
はやぶさ　安藤　和代（14）
四世代　清澤　範子（15）
お祝ひ　伊藤　忠男（16）
春よこい　森岡　陽子（17）
春の雪　白井　信昭（18）
天神人形　杉浦恵美子（19）
顔真卿　山口千惠子（20）
角ぐむ　夏目　勝弘（21）
金星
『ことよせ』　いーはとぶ　三田美奈子（22）
水野　絹子（22）
牧原　規惠（22）
稲吉　友江（22）
鈴木美耶子（22）
吉見　幸子（23）
牧原　正枝（23）
石田　文子（23）
森　厚子（23）
山崎　俊子（23）
現代学生百人一首　東洋大学
本間　凪（24）
風間　千晶（24）
小林　楓（24）
土谷　孟暉（24）
福澤　愛実（25）
松浦菜々子（25）
宮坂　康平（25）
望月　俊範（25）
森岡　陽子（26）
贈呈誌
童謡　いまこそ青春の時　高橋　育郎（28）
森岡　陽子（30）
『俳句』
松本　周二（30）
田中　清秀（30）
浜田　紀政（31）
柳田　晧一（31）
重野　善恵（31）
山迫　京子（32）
山元　正規（32）
今泉　由利（32）
植村　公女（33）
今泉　如雲（33）
杉浦　弘（33）
田中　清秀（34）
丸山酔宵子（36）
山本紀久雄（38）
今泉　雅勝（40）
かさね吟行会
『酔いの徒然』（84）　本田　勇気（42）
楽しい時間（77）　江上　浩二（44）
絹の話（101）　平井　茂行（46）
本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬　中屋　保之（48）
「江上浩二の独り言」
漢詩研修（三十）
奥の細道と恋句
沼津での牧水ゆかりの地を巡って（二）　鈴木　孝雄（50）
『歴代天皇御製歌』（九十八）　貫名海屋資料館（52）
御津磯夫短歌鑑賞　鮫島　満（56）
「氷魚」のことから（219）　岡本八千代（57）
編集室だより〔二〇一九年二月〕　今泉　由利（58）
野菜・まんだら（14）　（59）
「三河アララギ」について　（60）

アンカンサスの徑

御津磯夫

松風の音するときは植竹の大明竹のもとさへゆらぐ

へうへうと提げてかへる汝の手の小南口原（こなこうばら）の芒木菟（すすきみみずく）

ものの音きたらぬ庭にわがをりて椿もおそし馬酔木もおそし

一日二十四時間勤務の開業醫四十年にしてまだ生きてゐる

わが軒（のき）の紅梅の枝描かむと今年は花を長く待ちにき

紅梅の明日咲く花につもる雪老いぬればあはれ泰平の世ぞ

雪の中来たる患者のすくなきを幸として原稿用紙を展ぐ

ブェノスアイレスより来たりし穉子わが家にめざむる朝の三月の雪

木の下に掬ふばかりにのこりつつあしびの花よりこぼれたる雪

日本の舊（ふる）きわが家にゐるいく日子はかしづけり春日立雛

三河アララギ歌集Ⅱ

大須賀寿恵

白蠟のごとき感じとスモン病の足の素足に廊下を歩む

屈曲してもわからぬまでに麻痺の来し吾が右足の四本の指

治癒(なほ)るまで十年かかると聞かされて麻痺せる足をひきずり帰る

立ち上りてしばらく足踏みせしのちにスモン病の吾は歩み出づ

スモン病のむくみ来りし両足に退庁時の靴を爪叩きはく

ビタミンのB_1 B_6 Eを飲み飲み足しゆくはアスコルビン酸ナトリュームスモン病に吾が蹠は痛みつつ可不可を決めむゆとり失せゆく

右の眼の痙攣しきりの夕べにて鳩群れて来る校舎の棟に

癒ゆる日のありともつひに遠からむ鳩は飛び去る窓すれすれに

足萎えをつねに思ひてゐる吾や青田なびき来る風は水無月

歌集「續草々」

今泉米子

旅遠くゆくこともなしわが庭に日向のえびねの花茎ならぶ

ふりつづく雨に緑のはやくして楝の花は過ぎゆきにけり

伸び出でてまだ蔓延(はびこ)らず青によし奈良公園のびんぼふかづら

縦横に並びそろへる御佛を小学生なりし吾子はいひき

大千手観音菩薩の坐像には松の翠の高き供華立つ

あくがれて来り拝(おろが)む心さへせきたてられて群にしたがふ

變りなきことこそよろし變りなくわが生れし日の夕べとなりぬ

染付の伊萬里の甕に梅漬けむ手の届く枝より採り集めたり

むらさきの五月雨桔梗の初の花今朝隣より貰ひたるもの

思ほゆる太子の一代弁天池の睡蓮の遠きくれなゐ

三河アララギ歌集Ⅱ

河原静誠

草庵の丸窓近くレポートを綴りて居れば猫よりて来ず

三毛猫と吾と坐りぬ日だまりに今日は手編みにセーター編まむ

野良猫にけづり粉の飯やすやすと食はしてしまふ吾の三毛猫

幾夜もかかりわれの作りしボール紙の春駒の舞はただ二分間

園児等と影ふみをして帰りゆく永久橋に夕日のしづむ

腸切除の術後三年過ぎし今も幼児保育にひたすらはげむ

七度の師の忌めぐり来て香を炷く吾は保育を一日やすみて

夏休み幾日すぎし園庭に青々たくましくちゅうな穂に立つ

黒潮のしぶきをうけて石廊崎の磯岩に咲く磯百合の花

立冬の今朝日だまりの窓近くダチュラの花の白く咲き垂る

「老いの夢」

蒲郡　岡本八千代

わがことを客観的にみてみれば泣き虫よぼよぼの老いぼれにして
いたづらに刻一刻とすぎゆくごと昼餉すまして後(のち)のわれかな
今もまだあなたと暮してゐる如く幾たびも話すわがひとり言
わが独りの食器洗へばその音のあまりに小さく静かなる音
玄関に今年は飾るわが色紙「考えることの好きなお雛様」を
夫の絵の「潮凪(しほなぎ)」八十号を遂に遂に市の博物館にわれ寄贈す
いつまでも君の「潮凪」わが心に残りてをりつつ夜となりつつ

そして今わが家に飾るは「老(お)いの夢」この八十号は君とわれかも

「老いの夢」はおそらくこのままそのままに此の家(や)に残るかもしれずとも

窓よりは今日(けふ)は今日の夕ひかり「老いの夢」にも届くその光(かげ)

久しぶりに春めきて今日の青き空わが屋根の瓦のまんじゅう輝く

形原のもと中学生らの同窓会呼ばれて今宵はクラシックホテルの我

形中のＡＢＣＤＥＦ級会皆々大人になりしに驚く

頂きし白百合と赤き花々の大き花束抱きて帰らむ

老松の夜の下道われひとり花束抱へてタクシーの中

百人一首

豊川　弓谷久子

曇り日に子ははやばやと投票を済ませて来たり今日は知事選

一抹の寂しさもあり投票所を遠く感じて今日は棄権す

始めての棄権となりぬこもりゐて何時しか足の弱まりてをり

冴えかえる寒さと教え下されき御津先生は二月の風を

老木の紅梅今も咲きをらむ深き御庭のあの軒下に

先生と先輩と友に恵まれて幸せなりき歌会なつかし

河川敷も澱みも無くなり御津川は広くきれいな川となりをり

枯れ葦の河原に住みゐしヌートピア澱みに泳ぎゐし鯉等は何処

釈然とせず佇ち尽す御津川の静かな流れ見下しながら

つれづれに百人一首の解説本書棚の隅より取り出しにけり

一首づつ解説を読み詠み人を知る今更ながらと思えど楽し

意味も知らず百人一首を読み上げて遊びしはるかな正月憶ふ

農道まで今日は出て見む招かれしおひな祭りの日も近づきぬ

チューリップの緑芽出揃う庭に立つ風強けれど日は春めけり

終活をと言ひつつ何も片付かず二月は早しはやも過ぎ行く

雄蕊

東京　今泉由利

電線に少しかかりて細細し月齢は2私の窓
お釈迦様座します蓮台彫りつづく今日は蓮花の雄蕊四十
真地球の百万個分の大きさと太陽よりの朝日のとどく
思い出の父母の仕種に異国風加へて暮す私の日々
もっともっと一緒に居たかった父と母とを心に仕舞ふ
吉田城よりお駕籠に乗りて嫁ぎ来しと曽祖母のこと会ひたい会ひたい
父曰(いわ)く世界に向けてい出ゆけよそしてここに帰り来るべし
八歳の頃の疑問の解けぬまま私の一世終りてゆくか
オリエントに始まる獅子は東方・インド・中国・日本の狛犬
外来の霊獣たちまち日本化し阿吽も親しく神社の狛犬

知らぬことあまりに多きを知り得たり知らざるままは続きをりつつ

一羽ではない雀はいつも群れ来るよ楽しそうだと見守りゐたる

何一つ勝手許さぬ仏像彫刻それでも私の滲(にじ)みて仏像

はやぶさ

横浜　阿部淑子

毎号のアララギ拝読積みて越し句ごとに溢れる日々の生き方

アララギの寄稿されたる短歌より知識情操無限に広がる

はやぶさ2三億キロ先のリュウグウへみごとに着陸試料採取か

衝撃の緩和パーツは職人の丹精技術で精密着地

道端に一株咲きし水仙に顔近づけて香り称える

四世代

豊川　安藤和代

朝寒むの電線にひよ十五羽が誰れを待つのか身じろぎもせず
四世代暮らしたかの日なつかしく小さき卓に一輪をさす
背伸びして孫の寝ぐせをなおしやる七十五才陽ざしはぬくい
雪雲はいつしか消えて山やまもほほえむ様な野を見渡せり
春を待つ野は広びろと静もりてみどりの香かすかに流る
用水の流れのリズム軽やかに吾がキッチンに聞こゆ立春
アララギに志げさんの歌見なくなり寂し侘助葉の陰に咲く
志げさんの白菜漬けの旨し事まねたけれどもその味はでず
孫子等の福を願いて豆をまくひとりの部屋に声はり上げて
友からのしらすはあまた点ほどの目がいっせいに私を見てる
ガラス越しテラスは春を思わせてシャコバサボテンいっせいに咲く
胡麻和えの菜花に小さき花芽見え春をいただき心ほっこり

お祝ひ

春日井　清　澤　範　子

前立腺癌戦ひながらわが夫は弱き私を励ましくるる
八十七歳の耳遠くなりこし夫と部屋に居て筆談するなり茶を飲みながら
夫今年米寿なるなりお祝ひは娘と吾と元気に居ること
ジュリアンを鉢にたっぷり水を入れ色良く植ゑたり夫は手早く
今日の気温十八度にて庭椿春待ち切れず咲き始めたり
歌舞伎玉三郎の打ち掛けにも似て咲き続く庭の椿は豪華けんらん
満月の空は茜に染りくる庭の椿に夕陽照らすも
昨年の十月花芽の付き始む赤白混じりのわが庭椿
風寒く散歩は出来ず丁（ティ）の字の廊下にモップ掛けてリハビリ
低気圧高気圧と天気予報士は雨水の日にも雪だるまと風
立春の陽の暮れゆきて明日の日のため目覚時計を巻くなり
明け来たる白き窓辺に目覚めゐて新聞配達のバイクの音聞く

春よ来い

大阪　伊藤忠男

一面の銀世界かと思いきや黒土あちこち飛弾の高山
からくりと祭り屋台に細工物匠の技に見入る高山
役所とは今とて変わらぬ陣屋なり年貢取り立て裁きが役目
喜寿と古稀なにはともかくこの歳を迎え祝わん家内と私
春と冬境目無しかこの年の弥生如月区別なくなる
久しぶり声かけられし同僚の面影探す社葬会場
体力は気力のしもべなれば明日明日があるのが生きる力に
デフレから抜ける道とて値上げでは財布の紐の緩むはず無し
意識して統計操作通りせば国のほころびここに極まる
この歳に義理か本命意味無きや素直に嬉しチョコプレゼント

春の雪

東京　森岡陽子

明神の鳥居ぐぐりてかをり来る江戸期から続く天野屋甘酒

眠れぬ夜月の光もさまたげに何時もは癒され温かな光も

雪が降る紅梅咲き初むちらほらと立春過ぎの冬景色なる

湧水はちょろちょろと流れ入る実篤こだわる虹鱒の池

仕事部屋実篤使いしあれこれと机の真中丸眼鏡一つ

多摩川の土手に小さき花の咲く名は解らぬも春を告げをる

休みつつ八幡神社の石段を又休みつつ歩み遅くなる

初午に古色の店のいなり寿司リュック背負った老夫婦買う

春の雪静かに落ちる梅の木に紅梅の雪白梅に変ふ

友人と話しに夢中で横歩き歩道の高低引っ掛けて転ぶ

天神人形

豊川　白井信昭

軒下の狭く通る路荒ぶ西風庇(まぜひさし)のエスロンうち靡(なび)かせて
塀の基礎コンクリートうち砕く震ドル手ハンマタガネなど
朝刊に桜の便りいち早くカンヒ五分咲きと大神山八幡宮(おおみやまはちまんぐう)
もう少しきりのつくまでやめられぬ曇る短か日今日の返却
傾ける梅の古木の枝のびて目白きたれり静観しつつ
冬の日の奥の六畳間ほの光ほのぼのとして猫と遊べる
初孫匠真(しょうま)ひと月たちぬ如月(きさらぎ)の天神人形妻と買いゆく
人形の顔りんとして笏(しゃく)をもつ衣冠束帯の黒紺赤あり
管公の衣冠束帯黒くして軽く小さいケースに決めぬ
アパートの狭きなりにも玄関の上がり口飾る人形ケース

顔真卿

蒲郡　杉浦恵美子

夫は今この世の何処にも居ぬことを思ひ知る迄二千八百日
天麩羅を揚げるも上手くなりました夫よ貴方が得意とせしを
我が夫がビール片手に天麩羅を揚げて居たりし夕べ幾たび
天麩羅をささっと揚げて焼酎をちびりちびりが夫のスタイル
若き頃解らぬことも無駄じゃない不思議な筆法学びし日々よ
入場に七十分と云はれしが長いと思はぬ見たさが募る
顔真卿の祭姪文稿千年も時を隔てて生きて迫れり
半世紀顔真卿の骨太を剛さを実に今しも解る
今は我欧陽詢より顔真卿心引かるる血が通ってる
顔真卿展鑑賞したる昂ぶりを伝ふる人なしひかりの車中
料紙一杯無数に押されし朱の手形伊都内親王はうつし世の人
伊都といふ署名ぞ剛き高貴なる生涯なるべし伊都内親王願文

角ぐむ

豊川　山口千惠子

温み来し電気アンカを足先にたぐり寄せつつ眠らむとす
寒の日に晒す思いに俎板を立てかけ日向に干しておきたり
白き物干しつつ仰ぐ柿の木に二羽の目白のやさしきさへづり
一枚のハガキに書かれし短き文心たのしく癒されてゐる
何鳥か朝の窓辺に鳴く小鳥ただ聞きてゐる起きるまでの間
はや今日は立春なりと告げらるる寒さにこもりゐる日々にして
立春と言ひても何も変はらない春になりゆく日々を待つのみ
故もなくさびしさわきくる朝なり抜き来し大根力こめ洗ふ
機械音響かせながら終日をパワーショベルは家毀ちゐる
ビニールの紐に間取りを形どりて家ありしあとの黒土の上
擬宝珠の角ぐむ春の芽指にさはり乾ける土に水をかけやる
日足やや伸びたるかなと思ひゐる五時を知らせる童謡ひびく

金星

豊川　夏目　勝弘

昨日(さくじつ)は三ヶ月が金星の間近にありし今朝は金星の一つ輝き
ネムノキの枝の間に光りゐるその光りをば懐かしみ見つむ
東方の空を塞ぎゐる楠大樹に金星が懸かりをり明日は見えざらむ
金星に強き親しみを感じてならぬ冷えひとしほの朝の庭道
魂の我が故郷は金星とひとり決めして満足をする
金星の美男美女は九頭身と六頭身が我の現実
金星の輝きみえざる朝(あした)なり東よりの風に雨の匂ひす
東(ひむがし)の空の金星の見えぬ日つづく目(まなこ)に映らぬ光を浮べる
朝刊のほのかに温きを手に感じ短かき庭道をかけこみにけり
ストーブの前にて朝刊を広げて読む、十分余りの無駄なひととき
無駄もまた我にとっては大切ぞなれど無駄の多き日日なり
庭内も氷の張らざり冬ゆきぬ背戸の桧原にはやウグイスの声

『ことよせ』

（西浦公民館　いーはとぶ）

冬バラのつぼみかすかに揺れてをりほのかな紅のその慎しさ　三田美奈子

終活のひとつと思ひ赦せませ君のネクタイポシェットに縫ふ

都合により二十三日をイブとせむそれにてもサンタは急ぎ来るらし　水野絹子

平成の御代も終はるかあの頃は幸せなりきと想ふ日のあらむ

防寒にわれと分からぬ姿して大寒（おおさむ）の道歩きに行かむ　牧原規惠

わが畑のひねたる大根取りて来て切り干し漬けもの例年通りに

冬ざれの今年の畑の出来悪し細き大根二本を抜きぬ　稲吉友江

円かなる月光（かげ）淡く照らす夜よ疎遠の友に便り出したき

ゆりかごの形のやうな真夜の月少しだけカーテン開けて眠らむよ　鈴木美耶子

冬の日のガラス窓透かすこの日溜り気にかかること少しく融けつつ

年越しの食卓囲む家族六人平成最後の時は過ぎつつ　吉見幸子

新玉のみくじ「大吉」嬉しかり何か良き事ありそな気のして

「この冬は刈り込みやめてみましょうよ」枝葉の寂し椎の古木よ　牧原正枝

「さみしい」に「つらい」の題名かきてあり中学生の心の風景画展

免許証返還の日のせまりくる吾はいよいよシルバーカー押す　石田文子

残り雪隣の屋根に光る朝髪の毛黒々曾孫生まれり

わが庭の金木犀に日のさして緑葉光る小春日のけふ　森厚子

空青しけふの狭庭に雀きて金木犀に三羽か四羽か

早起きし空を仰げば東（ひんがし）に金星木星きらきらの光　山﨑俊子

寒き朝水がめに薄きこほり張り赤き金魚は哀れそのしたに

現代学生百人一首

東洋大学

大人しい君が歴女と知ってから好きになってる織田信長も

東京学館新潟高等学校一年（新潟県）　本間（ほんま）　凪（なぎ）

カラカラと心の不安が鳴っているマーブルチョコを奥歯で噛んだ

東京学館新潟高等学校三年（新潟県）　風間（かざま）　千晶（ちあき）

マニフェスト所属政策どれもみな信用できずにポスター睨む

東京学館新潟高等学校三年（新潟県）　小林　楓（かえで）

さわやかな鳥の声よりトランプのツイート気になるアラートの朝

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校一年　土谷（つちや）　孟輝（たける）

将棋さす祖父とアニキの背中にはプロとは違うやさしい沈黙

伊那西高等学校三年（長野県）　福澤愛実

「いい人」と思われたくて見栄を張る鏡にうつる「ワタシ」は誰だ

伊那西高等学校三年（長野県）　松浦菜々子

入学時むすべなかったネクタイが今ではしっかり一人前だ

上田西高等学校三年（長野県）　宮坂康平

授業中楽しんでいる僕がいる地理の授業旅行のように

静岡県立下田高等学校三年（静岡県）　望月俊範

贈呈誌

森岡陽子

冬雷二〇一七作品年鑑十自選合同歌集

○繋がらぬ電話に胸は騒ぐなり糸魚川火災実家は風上　斉藤トミ子
○陽に干せる寝具ふっくら膨らみて取り込む毛布に花びらつきくる　酒向陸江
○綿帽子かぶるお地蔵並ぶがに雪積む石が流れの中に　関口正子
○集落に昭和の歌を響かせて夫婦の販売車坂のぼり来る　田端五百子
○大震災に抱きついてゐし百日紅花散りつくし秋は近づく　沼尻操

月虹　125号12月

○木犀もみやぎの萩もほろほろと小花こぼして秋はたけゆく　佐藤紘子
○鉄塔の天辺に啼き合ふ鴉ゐて茜に染まり暮れなづみゆく　桜井範子

青森アララギ　第四百七号

○庭に来るキジのいつしか名の決まり福ちゃん情報子ら訊きたがる　竹洞早苗

○甘藻消え餌を無くしたる白鳥の仲間を連れて新地へ急ぐ　増田教子

鹿児島アララギ　2月号

○ふはふはと風に吹かれし石蕗の花窓より入りて秋は深まる　泊興子

○冬日さす田なかの川の石の上青鷺一羽風に吹かるる

秋楡　第一〇二号

○竹林の高々として苔庭に清められゆく羅漢の悟り　木村郁子

○くれないの楓ももみじの径をゆくその踏み音がわが鼓動かも　杉山千里

冬雷　2月号

○季またず落ちる樫の葉量多くたちまち枝の透きて見えくる　吉田綾子

○満ち満ちて目覚める朝に力湧く今日も仏に見守られてゐて　村上美江

いまこそ青春の時

高橋育郎 作詞

青春に年齢（とし）などない
人生意気に感じるとき
そこに青春はある
ああ　空はバラ色に輝き
人はくれないに染まる
生命の泉は　あふれ湧き
血潮はたぎり　胸は高鳴る

青春に年齢は問うまい
人生理想に燃えるとき
そこに青春はある

ああ　山は青く連なり
天空はロマンに満ちて
歓喜の鐘は　響きあう
ほほえむ未来を　この瞳で見よう

青春は意志のあらわれ
人生冒険に挑むとき
そこに青春はある
ああ　昴(すばる)の瞬きに憧れて
いま大海に漕ぎ出そう
万帆風をはらんで　時を呼ぶ
宣候(ようそろ)宣候　めざすはあの星

『俳句』

白梅や白狐鎮座の石鳥居
初午や石段奥のかぐら笛
淡雪は肩にふれ落つ斜の傘

森岡陽子

白子干し漁村の坂の石畳
臘梅や手入れよろしき槙垣根
海光の銀のさよりの簾かな

松本周二

いぬふぐり口笛で吹くわらべ歌
山鳩の行きつもどりつ土の春
たまゆらの穂先に残る春の雪

田中清秀

まんさくや野球の後の昼間酒
梅林にサキソフォンの音のびやかに
「気をつけて」と敷物広ぐ犬ふぐり

浜田紀政

犬ふぐり踏みいれがたき瑠璃の陣
犬づれやおしゃべりの人犬ふぐり
うつろな日いぬふぐり咲きはびこりぬ

柳田晧一

野菜畑乾きし土に春の慈雨
薄氷の微かにゆるる光かな
公園に幼な子の摘む犬ふぐり

重野善恵

畦道に瑠璃の日溜り犬ふぐり
書にひたる窓にいつしか春の雪
川波の光きらきら寒明ける

山迫京子

いぬふぐり畦にあふるる水の音
清正の井戸辞してより遠初音
いかなごのくぎ煮に残る潮の照り

山元正規

和歌一首俳句一句よ春うらら
赤まろし赤極まりぬ実南天
花芯には小さき実宿し梅の花

今泉由利

踏切の鳴り出してをり春隣り
谷根千（やねせん）の散歩コースや春浅し
拾われぬ一円玉や春の雨

植村公女

年ごとに寒がりになり雪の果
料峭や町で一番古きカフェ
冴返る昭和十八年の地図

今泉如雲

山陰をカーブ大きく花木五倍子
連翹や崩れ庇の裏明かり
仙丸の墓守りきて梅の里

杉浦　弘

かさね吟行会
「実篤公園」　二月

田中清秀

「君は君、我は我也、されど仲よき」「この道より我を生かす道なし、この道を行く」など心に残る名言や人生の支えとなる言葉を残した武者小路実篤は志賀直哉、有島武郎らと共に雑誌「白樺」を創刊した人。以後六十年余り文学はもとより美術、演劇などで活動を続け、一貫して人生の賛美と人間愛を語りかけた明治から昭和にかけて活躍した文豪である。

今月のかさね吟行会はその実篤が七十才からの晩年二十年間を過ごした邸宅のある実篤公園を散策した。京王線の仙川駅又はつつじヶ丘駅から歩いて十分ほどで到着する。敷地面積五千平方メートルの園内には、四季を通じて武蔵野の草花が咲き、そして秋は鮮やかに色づく紅葉が特に美しいと言われている。今は梅の香を楽しみながら遠く富士も望み、四阿で一休みしながら豊かな自然に親しむことができる。

文人の愛でし池畔や春きざす　　素山

遠足の石段登る園児たち　　周二
眉太き実篤像や花あせび　　京子

公園入口から武蔵野段丘に添って坂道をゆっくり下る、馬酔木や侘助の花を眺めながらしばらく行くと旧実篤邸がある。水の有るところに住みたいという子供の頃からの願いどおり、この仙川の地で安子夫人と二人で長閑な生活を過ごした。邸宅の建物の中に入ることはできないが、テラスの硝子戸越しに実篤が暮らした居間や仕事部屋を垣間見ることができる。実篤の死後、数々の遺品が遺族から調布市に寄贈され、ほとんど当時のままここに保存されている。

春浅し書斎に残る丸眼鏡　　清秀
波瑠越しの実篤の居間浅き春　　陽子
文豪の遺愛の画材余寒かな　　さち子
花八手木道辿る湧水池　　紀政

併設されている実篤記念館には何人かの文芸作家の自筆原稿が展示されていた。実篤の初期の作品から書簡、色あせた原稿用紙や自筆の書画の多くが所蔵され、また、志賀直哉、谷崎潤一郎の作品も保存されている。特に岸

田劉生は実篤の人生観に感化され、その邂逅を画家としての第二の誕生とまで言い残している。作家の自筆原稿から伝わる息づかいは時代を超えた不滅の輝きが感じられ、時を忘れて見入ってしまう。

「満七十に調布の土地に新しい家ができた。この家で僕は何となく夢みていた三つの事が実現されて僕は喜んだ、・・・それは自分の庭には水が有ること、それから古い土器が出る事、それに土筆がはえている事、之は何等の根拠の有る夢ではなかったが今度僕の住んだ庭ではこの事が偶然事実としてあらわれたのである。・・僕としては少し贅沢な庭である。」（「一人の男」より）本人も本当に気に入ってここで生活していたようだ。

初春の庭園では、「上の池」の湧水にニジマスが、「下の池」にはコイが泳ぎ、立ち茂る竹林やこんもりとした木立、野草の咲く庭には多くの野鳥たちもやって来る、ここは自然環境の尊さを教えてくれる別天地である。

虹鱒の走りて残す水の窪　正規
湧水に身を捩らせて鱒の列　浩一
鱒群れる木柵の池に笹の影　れい子
白梅の綻びはじむ理想郷　由利

大正七年には理想社会の実現に向けた活動に取り組み、宮崎県木城町に「新しい村」を創設し、誰もが正直に働き人間らしく生きられる社会を目指して自らも数年間過ごしている。学習院出身であった実篤の実践は、理想主義の青年層には反響を呼んだと言われている。ここで代表作の「幸福者」「友情」「人間万歳」などを書いている。

武蔵野段丘の公園は坂道が有りかなり急な事もあってやはり疲れる。記念館の休息所で白湯を頂きながら句作に取り組み、句会はつつじヶ丘駅まで戻り定番となったカラオケ店で行われた。いつも通りの嘱目三句出し四句選で行われ、早春の文学的な吟行会はお開きとなった。

■かさね吟行会■

日時　二〇一九年四月十二日（金）
場所　三渓園
集合　JR京浜東北線・根岸線
　　根岸駅　十一時集合
申込　森岡陽子宛　(03)3712・2835

『酔いの徒然』（八四）

丸山酔宵子

『箱根駅伝と「遙かなるセントラルパーク」』

平成最後、新年恒例第95回箱根駅伝が絶好なコンディションで開催された。箱根駅伝は日本マラソンの父とも呼ばれる金栗四三が創始者で、今年度大河ドラマ『イダテン』で話題沸騰である。

金栗四三は１９１２年に初めて出場したストックホルムオリンピックマラソンで途中倒れるという苦い経験を通して、世界レベルのマラソン選手育成を目指した。その一環として大学対抗駅伝の構想を練っていく中、奇想天外にも「アメリカ大陸横断駅伝」が計画され、１９２０年２月「アメリカ大陸横断駅伝」の選考会として第１回箱根駅伝が開催されたのである。

だが、日本発祥の最初の駅伝は、箱根駅伝開催の３年前、１９１７年東京奠都半世紀の記念行事として、京都・三条大橋から東京・不忍池まで約５００キロメートルの駅伝が挙行された。昼夜を通して23人のランナーが「たすき」をつなぎ、東軍のアンカーを務めたのが金栗四三であった。鉄道も未発達の大正初期に、「アメリカ横断駅伝」を日本人が独自で考えていたとは、その空前絶後のスケールに感心してしまう。

が、ここに一冊の痛快極まる本がある。それはトム・マクナブ著「遙かなるセントラルパーク」で、１９３１年ロサンジェルスからニューヨークまで３０００マイル（５０００キロ）のアメリカ大陸横断ウルトラマラソン大賞金レースを描く気宇壮大なフィクション・ドラマである。

イギリス貴族、炭鉱失業労働者、元オリンピック選手、貧しい村のメキシコ人、バーレスクの踊り子等まで、世界60ヵ国勿論日本も含め２０００人のランナーが魅力あふれる興行師フラナガンの下、誇りをかけてロスアンゼ

ルスからニューヨーク・セントラルパークめざして走りはじめる。灼熱の砂漠、雪のロッキー山脈、シカゴではカポネの一党が待ち構えたり、オリンピック委員会の妨害でレースは中止の危機に。だが彼らは、誇りと名誉をかけて走りつづけ、力を合わせて敢然とセントラルパークを目指すのである。

これぞ〝面白い小説〟の見本と大激賞された気宇壮大、爽やかな感動を呼ぶ傑作。その圧倒的な感動と興奮は今でもワクワクして思い出す。

正月三日箱根復路、澄み切った陽差しが昼酒の体に心地よい。青学大猛追！しかし、東海大学は強し・・・。やはり正月の酒のアテは箱根駅伝に限る・・・。

箱根路を登る吐く息白さ増し

酔宵子

楽しい時間　77

2019年2月28日

山本紀久雄

神にならなかった鉄舟・・・その七

銅像を建てるということの背景を考察するには、誰がそれを必要としたのかという問いかけが必要だろう。

勝海舟銅像は、東京都墨田区が必要として建てられたと推察される。勿論、実際の銅像建立は、海舟を評価する人々が寄付を集め建立し、それを墨田区に寄贈したのであるが、墨田区ホームページ記載内容から、高く海舟業績を認めていることがわかる。銅像の作者は墨田区に本籍があるという東京家政大学名誉教授の木内禮智氏である。

しかし、どうして建立が平成15年（2003）という海舟生誕180年まで待たねばならなかったのか。もっと早くても良いような気がする。

海舟の業績は、江戸無血開城を西郷隆盛との会見・交渉で成した、と高等学校教科書で認められており、世間一般にも広く認知されている。また、会見相手の西郷銅像は、上野公園に明治31年（1898）に建立されているから、平成時代まで海舟銅像が待たされたのは不思議だ。榎本武揚の銅像は大正2年（1913）に建立されている

一方、幕末に新政府軍への徹底抗戦を主張して、恭順派の海舟と対立した小栗上野介の胸像は、横須賀市に大正11年（1922）に建立されている。小栗の銅像は神奈川県横須賀市が必要としたと推察するが、建立された場所は現在の「ヴェルニー公園」とは異なり、当時の海軍工廠が見下ろせる諏訪公園であった。作者は朝倉文夫で「東洋のロダン」と呼ばれた著名な彫刻家である。

横須賀海軍工廠とは、慶応元年（1865）徳川幕府が横須賀製鉄所を建設し、明治政府に引き継がれ、明治4年（1871）に帝国海軍所管「横須賀造船所」となって、明治17年（1884）に横須賀鎮守府が設置されるとその直轄造船所となり、明治36年（1903）の組織改編で横須賀海軍工廠が誕生、呉海軍工廠と共に多くの艦艇を建造したところ。

また、現在の「ヴェルニー公園」一帯は、明治時代初期に横須賀が帝国海軍の本拠地となって、ここに海軍軍需部が置かれたが、昭和3年（1928）に田の浦へ移転後は、海軍工廠の一部と海軍運輸部となり、海軍の艦船や陸上部隊への軍需品の供給基地となって、施設はコンクリート塀で囲まれていたが、通りに面して商店・旅館・料亭などが建ち並び、とても賑わっていた場所。戦後はコンクリート塀が取り除かれ、昭和21年（1946）に「臨海公園」となって、ここに昭和27年（1952）、東京芸術大学教授であった内藤春治によって作られた小栗胸像が移転した。

海舟に戻りたい。東京都と墨田区が海舟の業績を高く評価しているのであるから、もっと早く銅像が建立されていてもおかしくないはずだ。

実は、これには海舟自身の考えがあったという。それを『銅像になった人、ならなかった人』（三原敏著　交通新聞社2016年刊）から見てみよう。

《そもそも海舟は「銅像」というものに興味がなかったようだ。

『海舟遺稿』を編集した亀谷馨が、海舟を訪ねた時のこと。亀谷が先生の存命中に銅像を作りたいと語ったところ、海舟は「銅像は人の造ったものゆえ、いつ何時、天変地変のために破壊されるか知れない。そうでなくても、時勢の変遷によって大砲や鉄砲の弾丸に鋳られるかもしれないよ。そんなつまらないことしてくれるより、銅像を造る入費の三割二分でもよいから、金でもらいたいよ」と一笑に付した。さすがに海舟である。その後、大東亜戦争で多くの銅像が大砲や弾丸と化していったことを、すでに予見していたようだ。

この逸話からしばらくして海舟は亡くなり（明治32年）、時の海軍大臣であった山本権兵衛は、海軍省に海舟の銅像を建てようと提案した。薩摩藩出身の山本は西郷の仲介により、海舟の知遇を得て海軍軍人の道を歩んでいった。海舟には深い恩がある。だが、海舟が生前、銅像などを馬鹿にしていたと聞いて、この計画は取り止めにしたそうだ。

一方、海舟の死から四日後の一月二十五日。葬儀が行われたこの日の『朝日新聞』には、徳川慶喜や家達をはじめとした人々が発起人となり、西郷と同様の海舟の銅像を建立し、上野公園に並立しようという計画があることが報道されている。

この計画のその後は不明であるが、明治四十三年（1910）十月十日の『朝日新聞』に投稿された「銅像建設に就いての所感」という記事が興味深い。投稿したのは海舟に銅像の話をした亀谷馨である。亀谷は近年、盛んに建立されている銅像に関し、その意義は良いが、報本反始（ほうほんはんし）（注　祖先の恩に報いること。儒教的理念の一つ）の理に反するものがあると嘆く。

例えば海軍省内に建てられている西郷従道・仁礼景範・川村純義の像だ。亀谷は従道らの功績を認めながらも、それならば、維新の前から海軍の発展に偉大なる功績のある人物がいるだろうと訴える。さらに神戸に建てられている伊藤博文像に関しても、それ自体には賛同するが、それならば二漁村であった神戸の地に幕末、神戸海軍操練所を設置し、その発展に貢献した人物がいるではないかと続ける。

つまり彼らの銅像を建てるなら、なぜ海舟の像を建てないのかと憤っているのだ。海舟自身が断ろうとも、やはり亀谷は海舟の像を建てたかったのである。ただし海舟の予言通り、ここで挙げられた従道・仁礼・川村、そして伊藤の像はいずれも大東亜戦争によって回収され、現存していない。彼らの像がいち早く建立された背景には、薩長閥ということもあろうが、もし海舟の像が建立されていたならば、やはり同様に回収されていただろう。「それ見たことか」と、地下から海舟の毒舌が聞こえてきそうである》

しかし、ここで不思議なのは、現在、海舟最大の業績が「江戸無血開城」だと、一般的に認識されているのに、上記記述では一切無血開城には触れていないことだ。

海軍創立への功績を強く述べている。当時の海舟への評価は今と異なっていたと推測できるのである。

海舟が建言し設置された神戸海軍操練所跡碑

絹の話（101）

「アトリエトレビ」今　泉　雅　勝

絹の来た道　これからの道　（その1）

絹の誕生

昆虫の家畜化は蚕以外に今日まで他に例を見ません。人類の歴史の中で、犬は2万年、牛馬は1万5千年、猫は8千年前に家畜化されたと言われています。

8千年前といえば、氷河期が過ぎ、大地に豊かな森ができ、針葉樹に代わり広葉樹林が広がった時期で、その腐葉土が育む植物プランクトンが川から海に注ぎ、豊穣な海が出来て来たのです。

蚕は少なくとも5千年以前には桑の葉を食べる小さなクワコの家畜化に成功して、中国で養蚕が行なわれるようになっていました。しかし他にも野外にはワコより大型の繭を作る昆虫は多種多様あり、どうして小さなクワコ（2粒の大豆）を選んだのでしょうか。そもそもどの様なきっかけで絹を発見したのでしょうか。

昆虫食

それは人々が狩猟生活が中心の時代、今日でも我々は蜂の子やイナゴを食べているように、当時の人々にとって昆虫食は簡単に入手出来る大切な蛋白源でした。

特に糸を吐く直前の幼虫の体がシルク蛋白でいっぱいになっている虫が美味しいですが、繭になってしまって、木の葉に付いているものの中身を食べようとしても、繭は強靭で石器などでは切り開いて中の蛹を取り出す事はできません。やむなく繭ごと口に入れ、蛹の汁を食したと思われます。その時、口から糸が出て来る事にヒントを得て、糸づくりが始まったと思われます。

この事の証拠の一つに愛知県豊川市に蚕を食べた犬が止めどもなく絹糸を吐いたと云う犬を祀る「犬神神社」がある事でも解ります。また昭和のはじめ頃までは、養蚕産地では生繭（乾繭にする前）を子供のおやつにしていた所もあります。その子達は繭をしゃぶり蛹を食べ、口から出る糸を親に渡していたようです。

それでも虫が不味ければ人は食べません、各種昆虫の中でもまずまずの食味感であったと思われます。

一昨年、ラオスの山岳地域の昆虫食などの食味人気度調査では、No.1は蜘蛛、No.2は蝉、No.3が蛹でした。

繭の色

野性の繭はそれぞれ捕食されないように回りの環境の色に似た特有の色（多くは濃茶、薄茶、緑、黄、グレー等）をもっています。またその色は紫外線等から蛹を守

る為の色でもあります。

ところが、クワコは他の野蚕繭にはない薄グレー、生成り等が多く、極めて白に近い色の繭もあります。

狩猟時代白は貴重な色です。長い年月をかけてより白い繭を作る蚕を選別して、今日の白色繭を獲得したのです。

解舒が容易

今日の繭では想像し難いですが、野性のクワコや初期の養蚕繭は糸の外側に付いて繭を固めているセリシンと云うニカワ質の蛋白質が少なく、今日の繭のように煮繭しなくても、糸口を見つければゆっくりと細い1本の糸を揚げられたから利活用に着目されたのでしょう。

それに引き換え、幾多あるクワコ以外の大型の野性繭は繭層が固く強靭で、簡単にほぐれて糸を揚げる事は出来ませんので、産業化の道から外れて行ったと思われます。

大人しい虫

もう一つ、昆虫の家畜化で大切な事は幼虫の運動性です。広範囲に動き回らなく、桑の葉をおとなしく食べる虫が飼育し易いのです。人はクワコを逃げなく、飛翔もしない家畜化に成功したのです。それが「蚕」、家蚕なのです。それは固い樹皮糸（麻）や獣毛にもはるかに勝る、軽く艶やかで美しく、柔らかく温かい理想の繊維の発見でした。それをより沢山手に入れるべく、より従順な虫ずくりに励んだのです。

強力な支配者の出現

数千年前になると、人々の中に国家的集団が出来て来て、身分制度も確立してきます。

彼らは新しい絹という衣服を纏う事によって権威を示し始めました。次第に絹の着用は支配階級の特権になって行きます。最高級絹を表現する言葉に象形文字で書かれた「蝉翼火因霧」（蝉の羽根のように薄く、霧のように柔らかい）と云う表現がそれを物語っています。

中国の歴代の王朝は絹の製法を西方等に伝える事を固く禁じていましたので、古代ローマの人々は絹が何から作られているか解らず、絹を「セル」、絹を作る人達を「セレス」とよんでいました。

七夕まつりは男が桑を育て初夏に繭ができ、夏に糸になり、女が機織りをする「絹まつり」だったのです。

この様な上質な物を織る時は、織り姫を覗いたり、声をかけてはいけません。気が散って織りムラができてしまいます。これが鶴の恩返しの話になっています。

日本では大化の改新から明治に至るまで庶民が絹の着物を着る事を禁じていました（紬は可）。

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田勇気

2019年1月30日

心も大人に

本田カイロプラクティックに
九州からいらしていただいてる
患者さんがいるのですが
このお子さん2人
めちゃめちゃ良い子なんです(笑)
本田カイロに来た時は
ほとんどの子達は
私が挨拶して挨拶してくれる
中には挨拶ができない子もいます
この2人
自分から私の目を見て大きい声で
挨拶してくれるんです
いつも
私の顔を見てニコニコしていて
会話の受け答えも
敬語もしっかり使えています
施術の時も
親御さんに促されることもなく
自分から
宜しくお願いします
ありがとうございます
と言えるんです
当たり前といえば当たり前なんですが
出来ない人も多かったりします
その親御さん
とにかく勉強熱心で
毎回私に様々な事を質問してきて
何十年前に話したことを覚えていて
実践しているんです
親の背を見て子は育つ
ちゃんとした大人に育てられた子供は
身体ばかりではなく
一人前の大人に成長するんだな
とつくづく実感しました
凄いことが出来るのもあれですが・・・
当たり前の
挨拶やマナーや思いやり
が出来る事の方が
とても大切ですよね

２０１８年12月12日

肌を乾燥から守る

先週は夏日の様な温度もありましたが
今週は
ビックリする師走の気温です
気温が下がるほど
空気が乾燥して湿度が下がります
そうすると
ウィルスもさることながら
皮膚の乾燥が気になります
皮膚が乾燥すると
色々問題が発生しやすくなります
一つの乾燥サインとして
痒み
があります
乾燥からの痒みは
どうしても　かいてしまいますよね
乾燥で皮膚が弱くなっているところを
かくことにより
さらにダメージが重なり
問題が発生します
ですので
朝活動前や風呂上りなどに
ワセリンを塗り
湯船にうろおい効果のある
入浴液などを入れて
肌を守って行きましょう
それでも乾燥が気になる方は
施術に来た際に聞いて下さいね

「江上浩二の独り言」16

江　上　浩　二

戦中の特別行為税

２０１９年初め、原稿のネタさがしで、自分のブログでキーワード検索をした。そのキーワードは「古本」で、古本漁りが好きな自分であるが、決して狙い撃ちで著名な著者の著名な本を買うのではなく、少し黄ばんだ古い本を安値で買い見つけ、偶然に出会った本を時間がある時に大事に読みたいと思う程度の事だ。

自分でも忘れていたが、〝２００８年最後の古本と特別行為税〟という２０１０年に書いたブログがヒットした。以下、その内容を示す。

２００８年年末、久しぶりに神田神保町界隈の古本屋街をウロウロした。

特に収穫もなく、とぼとぼと帰り道を行きはじめたら、神保町では有名なK書店のガレージセールが行われているのが、路地の方に見えたので足を進めた。しばらくあれこれと古本を物色していて、また何も収穫が無さそうだと思っていたところ、今まで気が付かなかったのか、好みの古本が３冊出てきた。

１堕落論、坂口安吾著、銀座出版社刊
２民謡覚書、柳田國男著、創元社
３ダンネマン大自然科学史第四巻（安田徳太郎、加藤正訳）、三省堂

右の２、３のタイトルは右側から書かれている。そうです、これらは黄色を通り越した茶色がかった紙面になってしまって、

１は昭和22年６月20日発行　定価60円
２は昭和15年５月20日発行　定価１円50銭
３は昭和18年６月20日発行　定価２円６銭　と当時の値段が印刷されている。

いずれもオリジナル版で、年末年始の休み中に目を通そうと思う。しかし、急いで読む必要も無いが、何か黄ばんだ古本を探し出した快感が残った。

本の内容は別にして、３は価格がちょっと半端だとよく見ると、定価２円で特別行為税相当額６銭（２０１９年加筆；３％）が加わっている。２の昭和15年発行本に

は特別行為税なるものは無かった。戦時下の特別行為税というのは昭和18年に消費行為の抑制のために導入された税だそうだ。

消費行為抑制とは今では考えられない。インフレの高度成長時代なら分るが。そろそろ政府も消費税を上げる計画を算段しているかもしれないが、それが消費抑制へと過度に働かねばいいがと思っている。

（２００８年12月初校／２０１０年４月加筆）

少し意味深な、特別行為〝税〟なるものが、消費行為抑制を目的とした〝消費税〟で、大変な戦時下にあって、少しでも物を大事にし、節約させるための勿体ない税みたいに押し付けられたのであろう。

現代版消費税は２０１９年の秋には８％から10％へ増税される流れであるが、これは今時消費抑制を目的とはしていない別の狙いがあるは明白である。本当は消費抑制でなく消費推奨・増進させる施策・複雑な課税制度の見直しをしてもらいたいと期待したい。現代版特別行為税は、膨らむ年金・医療保険・生活保護費用を少しでも補てん捻出する社会福祉〝税〟と理解しているが、予算が足りないからとと言って直ぐ増税へはしるのも短絡である。それこそ、過度な医療抑制、福祉の適正支援に対する特別行為控除みたいな仕組みを期待したい。

漢詩研修（三十）

千代田岳精会　平井茂行

鹿児島客中の作

誰が家の糸竹か空明に散ず
皎月南溟波駭かず

誰家絲竹散空明
皎月南溟波不駭

亀井南冥

孤客楼に倚る夢後の情
秋は高し一百二の都城

孤客倚楼夢後情
秋高一百二都城

【作者】亀井南冥（一七四三～一八一四）江戸時代後期の儒者。十四歳のとき、僧大潮元皓について詩を学び、後に大阪で永富独嘯庵について医学を学んだが、独嘯庵の師である山縣周南の影響から徂徠学派へ傾倒していった。安永七年（一七七八）三十六歳で藩儒（註　藩主に仕える儒学者）に、次いで四十二歳で甘棠館の祭酒（註　大学頭＝学長＝の唐名）となった。志賀島（福岡市東区にある陸繋島）で発見された金印の価値を見出した人物。金印が発見されてすぐに「後漢書東夷伝（「後漢書」の列伝の一に、西暦五十七年に倭奴国王が光武帝から金印を授かったという記事がみえる）」を引用して金印の由来を説明し、結果として亀井南冥の名が高まることとなる。

【語釈】＊糸竹・・・「糸」は琴、琵琶などの弦楽器、「竹」は笛などの管楽器をいう。＊散空明・・・月光に照らされて透き通るような明るい空に、笛の音が響きわたること。＊孤客・・・たった一人の旅人。＊皎月・・・白く輝く月光。＊南溟・・・南方の大海。『荘子』（逍遙遊編）にある。＊波不駭・・・波がおだやかなさま。＊一百二都城・・・『史記』に「秦形勝之國、帯河山之險、縣隔千里、持戟百萬。秦得百焉、地勢便利。秦は形勝の国河山の險を帯び千里に縣隔し、持戟百万あり。秦は百二を得、地勢便利なり）」とある。「百二」の「二」を倍とする説と、他に百倍する意ととる説がある。

『奥の細道と恋句』

中屋保之

閑寂の詩人と呼ばれる芭蕉は、同時に恋の句を数多く残した濃艶の詩人でもあった（東　明雅著「芭蕉の恋句」より）。

「蕉風」と呼ばれる作風をおこし、俳諧連歌のようにただ面白おかしいだけではなく、句の中に自然への思い・人生への思いを込めて芸術的な域にまで高めた芭蕉は、発句（俳句）より俳諧（連句）に自信を有していたという。しかし、私たちが接してきた芭蕉は旅の詩人であり、わび・さびの詩人である。日常生活も出家同様の浄らかな彼が、俳諧では多くの素晴らしい「恋句」を詠んでいることに、俳聖とは違った親しみを覚える。

そこで今回は、『奥の細道』の旅の中で詠まれた恋句を辿ってみる。

元禄二（一六八九）年三月二十七日、門人で同行者の曽良とともに深川を出立した芭蕉は、千住から真直ぐに北上し、春日部・間々田・鹿沼・日光・玉入と泊まりを重ね、四月三日に那須野の黒羽在の翠桃の元に逗留する。この間に、翠桃やその兄の秋鴉などを連衆にして『奥の細道』での第一作目の俳諧を興行する。

一　発句　**秣おふ人を枝折の夏野哉**　芭蕉

二　脇句　**青き覆盆子をこぼす椎の葉**　翠桃

・　・

三十六　挙句　**珍しき行脚を花に留置て**　秋鴉

弥生暮ける春の晦日　桃里

この様に三十六句並べるのを歌仙俳諧と言い、芭蕉は主にこの形式を用いたそうである。

さて、恋句であるが、この連句中の五、六、七、八、十五、十六がなんとも、小宮山隆氏（昭和八年刊『芭蕉の研究』の著者）がその「芭蕉の恋の句」で述べられた《芭蕉の中には濃艶な世界もある。従つて芭蕉も亦元禄人の一人であるに外ならないーさういふ事実の道破はこれまでの人間離れのした神様かなぞのやうに考へられてゐた芭蕉の中に、初めて人間らしいものを注入したといふ意味で、今日の芭蕉学に貢献する事の多い発見である事は、説明を要しない。》にあたる様に感じられる。（傍点は原本通り）

五　**箸鷹を手に居ながら夕涼**　翠桃

六　秋草ゑがく帷子はたそ　曽良
七　ものいへば扇子に顔をかくされて　芭蕉
八　寝みだす髪のつらき乗合　翅輪
・
・
十五　あの月も恋ゆゑにこそ悲しけれ　翠桃
十六　露とも消ね胸のいたきに　芭蕉

更に、『奥の細道』での恋句（一部）

「風流の」の巻（須賀川）
有時は蟬にも夢の入ぬらん　曽良
樟の小枝に恋をへだてゝ　芭蕉
宮にめされしうき名はづかし　曽良
手枕にほそき肱をさし入て　芭蕉

「さみだれを」の巻（大石田）
星祭る髪はしらがのかるゝまで　曽良
集に遊女の名をとむる月　芭蕉

「有難や」の巻（羽黒）
月見よと引起されて恥しき　曽良
髪あふがするうすものゝ露　芭蕉
盗人に連添妹が身を泣て　芭蕉
いのりもつきぬ関々の神　曽良

一一八巻に及ぶ歌仙に、恋句の総数は四一二句もあるという。まさに「濃艶」の詩人であり、「人間らしい」芭蕉を垣間見る思いである。

【参考文献　東　明雅著「芭蕉の恋句」など】

沼津での牧水ゆかりの地を巡って（二）

沼津　鈴木孝雄

健康が回復するにつれ創作意欲が戻り、大正一〇年に第一三歌集「くろ土」大正一三年には第一四歌集「山桜の花」を発行。また、すぐれた紀行文集「みなかみ紀行」を大正一三年に発行している。

一方、短歌同人誌「創作」の発行所を大正一一年に沼津に移して以来、会員数は徐々に増加。編集と経営を一体化させ、沼津に拠点を移す計画を実現させる段階に至った。

このような時に、降って湧いたのは香貫の家の退去要請。元々借家の差配人とはそりが合わなかったが話が急だった。取り急ぎ、大正一三年八月千本松原近くの沼津市本字松下七反田九〇八に新築中の狭い借家に引っ越した（図一の②住居跡から南東に約四〇〇m）。この引越が、自分の家を持つ、との計画を実行に移す弾みとなった。一二月には近くの借家にもう一度引っ越している。約一〇〇m裏は千本松原で、書斎の二階からは愛鷹山・富士山が見渡せ、牧水はこの場所には満足した。

新築の住居用の土地は約五〇〇坪、土地購入費用約七千円の内四千円は借金で賄わざるを得なかった。この借金が結果的には牧水の命を短くすることになってしまった。

住居の位置（図一の②の地点、沼津市本字南側六一）は、千本松原から約一〇〇m。自分の庭のように松原が眺められ、松林の散歩にも便利な所で、牧水は大変気に入った。

むねあげの祝ひのもちをわがまくや
千本松原の松の数ほど

二階建て計一一室、七九坪の念願の新居に大正一四年一〇月一家で移り住んだ。

住居は残念ながら、第二次世界大戦で焼失。現在はT

ＫＤマンションの敷地に「牧水旧居」の石碑のみが建っている。

牧水がこよなく愛でた千本松原、写真のような松林を歩き多くの歌を詠んでいる。

千よろずの松にまじらふこの松の
ひたに真直ぐにひたに真青き

松原のしげみゆ見れば松が枝に
木がくり見えてたかき富士が嶺

日に三度来り来飽かぬ松原の
松のすがたの静かなるかも

牧水は、詩、短歌、俳句などを一つにまとめた念願の詩歌総合雑誌「詩歌時代」を、大正一五年に発刊した。意欲的な雑誌の評価は高かったものの、資金難から僅か六号で廃刊に追い込まれた。

（つづく）

「歴代天皇御製歌」（九十八）

貫名海屋資料館

〝皇室と和歌の歴史〟

天照大神より神武天皇が国をはじめられてから百二十四代にわたって歴代の天皇方が皇位を受け継いでこられ「和歌」に親しまれた歌人であられた。「詩歌」「ことば」「ことばに宿る〝心〟」。かけがへのない文化遺産として、今上天皇まで受けつがれる。

日本最古の和歌

タチハヤスサノヲノミコト

八雲立つ　出雲八重垣　妻籠みに　八重垣つくる　その八重垣を　　古事記上巻

「古今和歌集」の編者　紀貫之の序文

「やまとうたは、人のこゝろをたねとして、よろづのことのはとぞなれりける。世中にある人、ことわざしげきものなれば、心におもふことを、みるものきくものにつけて、いひだせるなり。花になくうぐひす、水にすむかはづのこゑをきけば、いきとしいけるもの、いづれかうたをよまざりける。ちからをもいれずして、あめつちをうごかし、めにみえぬおに神をもあはれとおもはせ、おとこをむなをもやはらげ、たけきもの、ふの心をもなぐさ

むるはうた（和歌）なり。」

初代天皇　神武天皇御製

みつみつし　久米（くめ）の子らが　粟生（あわふ）には　臭韮（かみちひともと）一茎（ひとくき）　そねが茎（もと）　そね芽つなぎて　撃ちてしやまむ

みつみつし　久米の子らが　垣下（もと）に　植ゑし山椒（はじかみ）　口ひひく　吾は忘れじ　撃ちてしやまむ

葦原の　しけしき小屋に　菅畳（すがだたみ）　いや清（さや）敷きて　わが二人寝し

倭健命の御歌

倭（やまと）は　國のまほろば　たたなづく　青垣　山ごもれる　倭し　うるはし

命（いのち）の　またけむ人は　畳薦（たたみこも）　平群（へぐり）の山の　熊白樫（くまかし）が葉を　髻華（うづ）に挿（さ）せ　その子はしけやし　吾家（わぎへ）の方よ　雲居立ち來も

乙女の　床の邊に　吾が置きし　つるぎの大刀　その大刀はや

七世紀頃の祖先は、英雄の必須条件としてすぐれた歌の作者であることを信じた。

外国の歴史に、その存在が認められる時代の仁徳天皇（二九〇ー三九九）

御在位半ば、朝鮮半島に出兵。百済と新羅を従へ、高句麗と対戦され、四世紀半ばごろ半島南端に「任那日本府」を設置され、日本が統一国家としての姿を内外に示された。

沖方には　小船連らく　くろざやの　まさづ子吾妹　國へ下らす

天皇は、黒日賣に戀いたまひて、大后をあざむきて「淡路島を見むと欲ふ」と幸い行でまし歌曰ひたまひし。

おしてるや　難波の崎よ　出で立ちて　我が國見れば　淡島　自凝島　檳榔の　島も見ゆ放つ島見ゆ

其地の菘菜を採む時に、天皇の嬢子の菘採める処に坐して、歌曰ひたまひし

聖徳太子（五七四ー六二二）

憲法の第一條に「和を以て貴しと爲し忤ふことなきを宗と爲す」

君民一体、挙国一致協力の綜合的創造力をもってすれば、いかなる難事も遂行しうるにちがひないと、日本の国柄の信念を披瀝せられた。第三條の「君言臣承」「承詔必謹」の政治思想の根拠としての、国家社会家庭生活の普遍的の原理である。

『古事記』の原型と思はれる日本歴史を編纂されたこと、太子の「上和下睦」「君言臣承」「皇神のいつくしき國、言靈の幸はふ國」。

聖徳太子の御歌

しなてる　片岡山に　飯に飢て　こやせる
その旅人あはれ　親なしに　汝生りけめや

さすたけの　君はやなき　飯に飢て　こやせる
その旅人あはれ　いかるがの　とみの井の水
生かなくに　たぎてましもの　とみの井の水

御津磯夫短歌鑑賞　16

「月虹」　鮫島　満

まほろばの山形葡萄の黒き房思ふは百房に降りそそぐ雨

『月下の華』昭和五十八年

「まほろば」はすぐれたところの意で、この頃には山形はすでに桃、梨、桜桃、葡萄等の国内有数の産地として知られていて、作者が単なる賞め言葉として用いたのではないだろう。そこで採れた葡萄を前にしての作であろう。

ここで作者は「百房に降りそそぐ雨」、すなわち、斎藤茂吉の

沈黙のわれに見よとぞ百房の黒き葡萄に雨ふりそそぐ

『小園』昭和二十年

を思い、敗戦を疎開先の故郷山形県上ノ山で知った茂吉の哀しい心を思ったのである。祖国の勝利を信じ願って、日本の「快進撃」に興奮しては戦争短歌を量産していた茂吉が敗戦を知ったのちの心に、多くの茂吉短歌愛好者は泣いたのだった。

茂吉は敗戦の日には敗戦を詠まなかった。詠めなかったのである。辛うじて詠んだのは、

新島（にひじま）ゆ疎開せる翁とつれだちて天皇のみこゑききたてまつる

停戦ののち五日この村の畑のほとりにわれは休らふ

であった。「天皇のみこゑ」を聞いたとしか詠むことはできなかったのであり、「停戦」と詠むのが限界だった。そして、日々、故郷の自然の中で来し方を思い、その母なる自然の中で心を癒やそうとしている。そのような中で右に挙げた「沈黙のわれに見よとぞ」の歌を詠んだのであった。

この歌を口ずさむとき、作者は茂吉の心を思って泣いたことを思い出したであろう。これは悲しい歌なのである。

茂吉は翌二十一年一月末から大石田に転居し、『白き山』の絶唱を詠む。

「氷魚」のことから（219）

岡本八千代

二月は逃げるように去ってゆく。朝からこの稿を書こうとしていたのにもう夕方になってしまった。庭の紅馬酔木の花房が風に小さくゆれている。ま上の空には名も知らない大きな雲がたちはだかっている。何にしても黄昏はまた人の心を優しくするようだ。

今、「いーはとぶ会」は土屋文明の勉強をしているまっ最中。文明氏を問うに、やはり伊藤左千夫を問わねばならないだろう。

伊藤左千夫は、子規の和歌の伝統を伝える目的で子規の死の翌年（明治36年（１９０３年）に彼が中心となって、子規の和歌の伝統を伝える目的で、根岸短歌会の機関紙「馬酔木」を創刊した。そして、次第に茂吉、赤彦、憲吉（１８８９年～１９３４年）といった人々が集まってきて、「馬酔木」の廃刊を余儀なくされてしまった。代わって。三井甲之（１８８３年～１９５３年）がその継承誌として「アカネ」を創刊した。（明治41年（１９０８年）から42年にかけて六号発行した。その間、左千夫と甲之のあいだに不和が生じ、左千夫は同年に独自に「アララギ」を創刊したのであった。やがて、それはもっとも重要な短歌誌としての地位を確立したのであった。（大正2年…１９１３年）から十五年までは島木赤彦の編集の下で（大正15年から昭和28年…１９５３年）までは斎藤茂吉の下で、その地位を保ち続けてきたのであった。かくして、近代短歌における主要な流れとなってきたのであった。

伊藤左千夫は、子規よりも年長の弟子で（１８６４年～１９１３年）あった。伊藤は、子規の「写生し論より歌の主観的な様式を好んだので、二人の意見の対立もあったという。しかし、子規は新聞日本の短歌欄に左千夫の作品を三首掲載をしたのであった。左千夫はそこからいっぺんに、子規に対する反発は消えて、「吾が崇拝する子規子」という文を発表した。その中で、「吾が視たる子規子は円満無垢の子規子である。光明赫灼たる子規子である」と書いたほどであった。―。左千夫は、短歌の調べをかなり重視しており、「短歌の形式は、詠み手の主観によってつなぎ合わされた『帯』の一部として、描写というよりは一つの『叫び』として情緒の揺れの直接的な表現として見なすようになっていた。」

〝人の住む国辺を出でて白波が大地両分けしはてに来にけり〟　伊藤左千夫

Leaving behind me
The world where other men live,
I reached the border
Where the white waves divided
The earth into land and sea.

左千夫は、連作を唱道したことでも知られている。「歌人のそれぞれの歌がまったく独立しても、全体としてはひとつの長い歌の印象を生み出すことができる」と言っている。

（参考資料--ドナルドキーン著、新井潤美訳より）

編集室だより【二〇一九年二月】

今泉由利

○〝何時〟彫り始めたのか忘れてしまう程、長い間「釈迦如来坐像」に取り組んでいる。彫っている間中、心地良い檜の薫りにつつまれ、お釈迦様のことだけ思っている。印度より、私にまでおいでいただけて、こんなに夢中です。小学校の遠足で「風来寺山」へ行った。祖父が、仏法僧鳥がいること、ブッポウソウと鳴くのはコノハズクというミミズクとか、教わって出かけたのでした。

大人になってから身延山で、テープからコノハズクが仏法僧と鳴いているのを聞いたことがあった。仏＝釈迦のこと。法＝釈迦の教えが法であり、僧＝その教えを受けるのが僧であると。

この頃、漢詩吟のクラスで『後夜仏法僧鳥を聞く、空海作』を教わった。身延山で経験したことそのままが詩になっていて、こんなにありがたり巡り合わせに浸っている。

○武者小路実篤記念館、実篤公園へ、俳句の吟行。「野菜や花の画に、言葉を添えた作品」その作者の、武蔵野の草木々の庭、家、作者の範囲に立ち入らせていただけて、この少し昔感が心地良い。

○日本武道館・ジャネット・ジャクソン

STATE OF THE WORLD TOUR 2019

〝凄いな〟とばかり思っていたマイケル・ジャクソンの妹。折角日本まで来て下さるのだから、是非。願いかなって、出掛けた。

偉い！二時間半のステージ中、メドレー25曲をノンストップで熱唱。衣装を変えたり・・・とかしない。彼女からほとばしりくるものだけが武道館を埋め尽くした。いまもまだ、彼女のリズムの中に居る。

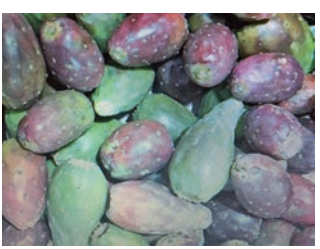
○ドナルド・キーンさんが亡くなられてしまいました。ドナルド・キーンさんが、日本の東京の北区に住まわれるようになり、月々の「三河アララギ」をお届けさせていただいていました。『分かり易い、内容の面白い歌が多いように思いました』とご自筆でお手紙も下さいました。どんなにありがたく心強く思いましたことでしょう。

北区図書館に、キーンさんがご著書を寄贈されたコーナーがあり、私は、ここの常連です。沢山のことを教わりました。これからもずっとずっと教わりつづけます。

ニューヨークに滞在する時は、キーン先生の住んでおられたことを思いながら、私のニューヨーク散歩を興味深いものにして下さるのでした。北区図書館が私の住いのすぐ近くにあるのですから、大丈夫です。これからも、しっかりお教えをいただきます。

ドナルド・キーン先生、ありがとうございました。

野菜・まんだら　（14）カクタス・ペア　カクタス・リーフ
Cactus Pear, Cactus Leaf



○サボテン科ウチワサボテン属

○原産地　アメリカ南部、中央アフリカ　カリブ諸島

○ウチワサボテン属の果実をカクタス・ペア、葉をカクタス・リーフと食用にする。全体に鋭いトゲがはえている。果実にもいっぱいトゲがある。

○アルゼンチンの友人の別荘の庭の大きなウチワサボテンの実や葉を収穫するのにブ厚い皮の手袋をしたことを思い出す。

○アミノ酸やカルシウム、ミネラルを豊かにふくみ、健胃作用、消炎、解熱、火傷、鎮咳・・・と。すりおろしたり、搾り汁にして用いる。

○カクタス・ペアはトゲを取り、果実の両はじを切り、皮に切れ目を入れ、フォークで押さえ、皮目にナイフを走らせると、コロンと可食部分だけになる。

○カクタス・リーフは、やはりトゲを取り、大きな肉をドサッと焼くアサードの隣のスペースで焼いた。ナイフとフォークがあるのだから、皮をむいたり、好みの大きさに切り取ることが簡単に出来、興味深い食べ物です。

○皮をむき、油をひいたフライパンで、サボテン・ステーキも良い。

○メキシコの屋台で、サボテン果実ジュースをのんだことあったなー。

今泉由利

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所　〒一一四-〇〇二二
東京都北区王子本町一-二六-六-A
TEL（〇三）五九二四-二〇六五
◇URL　http://imaizumiyuri.jp/
E-mail　yuriimaizumi@jcom.zaq.ne.jp
◇編集・発行　今泉由利・森岡陽子
◇三河アララギ誌は毎月発行します。
◇会員・今まで会員の方。希望される方。
◇会費制　廃止。
◇新しく購読を希望される方　一ヶ年五千円。
◇振替口座　〇〇八三〇-六-五六二二九
◇原稿送付先　〒一一四-〇〇二二
東京都北区王子本町一-二六-六-A
◇原稿は毎月末日までに郵送下さい。